

日本東洋医学会中四国支部島根県部会 第24回学術講演会

日 時：平成25年7月7日(日) 12:30~15:30

会 場：地域医療センター益田医師会病院

実 行 委 員 長：大森あさみ (石見クリニック)

1. 慢性蕁麻疹に対する越婢加朮湯の有用性

石見クリニック 大森あさみ

慢性蕁麻疹と診断され当クリニック漢方外来を受診し越婢加朮湯を使用した全14例につきその有用性について検討した。

【方法】内服方法はツムラ越婢加朮湯エキス7.5g分3で毎食前に内服、または越婢加朮湯液(麻黄6.0, 石膏8.0, 蒼朮4.0, 大棗4.0, 甘草2.0, 生姜1.0g)を分2朝夕食前に内服とした。全例で抗アレルギー剤を内服していたので越婢加朮湯開始とともに内服を中止とした。剤形はエキス10例, 湯液4例であった。

【患者背景】平均年齢45.2歳, 中央値44歳, 性別は女性11例男性3例, 原因は不明12例機械性2例。発症から当クリニック受診までの期間は平均122週, 中央値44週であった。

【結果】症状改善あり加療の中止に至ったのが11例, 全例原因不明の慢性蕁麻疹だった。症状の改善を認めるが越婢加朮湯内服を継続しているのが2例。原因不明が1例, 機械性蕁麻疹が1例。症状改善なく漢方薬を継続しているのが機械性蕁麻疹の1例。症状改善を13例とすると改善率は92.8%であった。

越婢加朮湯内服開始から症状改善による内服中止までの期間を通院期間とした。平均31.3週, 中央値20週だった。

漢方的に越婢加朮湯の使用目的は浮腫, 自汗, 口渴, 尿不利だと考えられる。通院期間と使用目標の分散分析をしたところ口渴だけが有意差が認められた。口渴が強いほど症状改善による内服中止までの期間が短かった。

【結語】

1 慢性蕁麻疹により当クリニック漢方外来を受診した14症例に対し越婢加朮湯を使用, その有用性について検討した。

2 越婢加朮湯により14例中13例に症状の改善を認めた。

3 口渴の強い症例ほど通院期間が短かった。

4 越婢加朮湯は慢性蕁麻疹に対し有用であった。

2. 真武湯が奏功したアトピー性皮膚炎の3例

内海皮フ科医院 内海 康生

アトピー性皮膚炎の治療において西洋医学的治療では上手くいかず, 漢方治療が奏功することをしばしば経験する。皮膚に表れている症状を改善することを標治, 体質を改善することを本治と言われるが, 標治, 本治を考慮した処方が有効なことが多い。今回, 本治として処方した真武湯が奏功したアトピー性皮膚炎の3例を経験した。

【症例1】47歳, 男性。平成16年12月初診。抗アレルギー剤の内服, ステロイド剤の外用などにより皮疹は軽快した。以後, 季節の変わり目に増悪して来院。平成19年夏から赤みを帯びた皮疹に対して清熱剤の消風散, また舌診にて舌下静脈の怒張を認めたため, 瘀血として桂枝茯苓丸を処方し, 漢方治療を開始した。なお秋から冬にかけては皮膚の乾燥傾向を認めたので消風散を温清飲に変更した。その後, 毎年ほぼ同様の処方で治療を行ったが軽快と増悪を繰り返していた。平成24年3月に皮疹が改善しないため, 診察時に腹壁を触れてみたところかなり冷えていることに気づき, 桂枝茯苓丸に変えて真武湯を処方したところ次第に皮疹が改善した。なお顔面の皮膚の健常化が認められたのが特徴的であった。

【症例2】32歳, 男性。平成24年5月初診。ステロイド剤, 抗アレルギー剤, 標治として消風散, 気虚を伴っていたので本治として補中益気湯の内服, ステロイド剤の外用などにより皮疹は次第に軽快した。以後, 初診時よりかなり改善していたものの, 部分的に皮疹は続いていた。初診から3ヶ月経って消風散で下痢をするようになった。

たとのことで消風散を中止した。さらに1ヶ月後の来院時に腹壁を触れてみたところ冷えを認め、真武湯を処方した。真武湯、補中益気湯の処方を継続し6ヶ月後には躯幹、顔面の皮疹はかなり改善し、一部健常な皮膚が認められた。また腹壁の冷えも改善していた。現在も同処方を継続中。

【症例3】47歳、女性。平成24年3月初診。上半身に皮疹が多くみられ、上熱下寒の状態、舌診にて舌下静脈の怒張を認めた。初診時より抗アレルギー剤、標治として温清飲、本治として駆瘀血剤の桂枝茯苓丸の内服、ステロイド剤の外用などを処方した。以後、初診時よりかなり改善したものの、部分的に皮疹は続いていた。初診時より3ヶ月経って季節が春から夏に向かってきたので桂枝茯苓丸を消風散に変更した。さらに4ヶ月後の季節が秋になってきた頃、診察時に腹壁、特に臍のあたりが冷えているのに気づき、消風散を真武湯に変更し、温清飲、真武湯の処方を継続した。以後、真武湯をベースに温清飲を変えて治頭瘡一方や梔子柏皮湯などを処方した。次第に躯幹、顔面の皮疹は改善し、乾燥傾向が減少し、健常な皮膚が認められるようになった。

真武湯はアトピー性皮膚炎に処方されることは少ない

ようであるが、裏寒虚証で、腹壁の冷えなどを目標に本治として処方すれば有効な方剤と思われた。また皮疹が改善後、健常な皮膚が認められたのが特徴的であった。

3. 皮膚筋炎患者の消化器症状に真武湯が有効であった症例

益田赤十字病院神経内科 松井 龍吉
島根大学医学部内科学第三 山口 修平

4. 島根大学附属病院漢方診療教育外来の現況について

島根大学医学部臨床検査医学 長井 篤
斐川中央クリニック 下手 公一
益田赤十字病院神経内科 松井 龍吉
島根大学 小林 祥泰

【特別講演】

「附子・烏頭剤運用の提言

附子・烏頭の特性を知って賢く運用しよう」

にいざわ内科・漢方クリニック

新澤 敦先生